

## 復活節後第二主日

「主イエスの郷里伝道」

ルカ4：14－30（1）

先週は、荒野において、40日40夜、主イエスが悪魔に試みられた箇所でした。

今朝は、それに続く13節以下です。

「誘惑の手を戻さしたあとで、悪魔はしばらくの間イエスから離れた」（11）とあります。悪魔は無制限な動きが許されているわけではありません。むしろ、神に「コントロールされています。すなわち、神が許容なさる範囲で動き、存在しているに過ぎません。」

主イエスは、ヨハネが逮捕された噂を耳にして、ヨルダン一帯から、聖霊の力を帯びてガリラヤに向かい、次いで郷里のナザリに足を向け、「いつものとおり安息日の会堂で教えられた」とあります。

バビロン捕囚後、動物のいけにえをささげる祭儀中心の礼拝は、ほぼイスラエルから消滅してしまっていました。主イエスの時代になると、祭儀「ではなく、「御言」を中心とした礼拝へと変化していきました。これは、今日のプロテスタント教会の礼拝形式とほぼ近いものになったと理解して良いかと思われます。

主イエスは、「いつものとおり安息日に会堂で教えられた」（16）なのですが、「自分のご都合や気分次第で、会堂に足を運び教えたのではありません。自ら「安息日のしもべ」とへりくだりました。わたしたちもまた、安息日のしもべとして安息日中心の生活を整えて

いかなばなりません。

主イエスが会堂に入ると、会堂司から手渡された巻物は、イザヤ書61章1節から2節の箇所でした。スピーカーもマイクもない時代です。多くの群衆を前に、山の上で説教をなされたお方とすれば、朗々と響き渡るような声で聖書を読み上げたのではないのでしょうか。

そして、最後に、「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました」と意外なことを言われて、ナザリの人々は、「その口から出て来る恵みのことばに驚いた」（22）といっているのです。

主イエスが朗読されたイザヤの1章1節は、さかのほること、BC750年に預言者イザヤが述べた言葉です。

最後の19節は、「主の恵みの年を告げ知らせるためにおいでになる」「おいでになる」とは、実は「救い主がおいでになる」と預言されている箇所です。主イエスは、こともあろうに、「あなたがたが今日耳にしている御言は、今、このわたしにおいて実現したのです」と公言なさったのです。

「主の恵みの年」とは、特別な年、「ヨベルの年」を指していました。しじ記25章を見ますと、「7年目毎に「安息年」が定められておりましたが、安息年が7回めぐりきた次の年、つまり50年目を「ヨベルの年」と呼んだのです。「ヨベル」とは、「雄羊の角笛」ですが、その「ヨベル・角

笛「を四方に吹き鳴らして」「安息年」を盛大に祝ったことから、「この名が付いたといいます。」

「ヨベルの年」には、畑地を耕すことが禁じられました。また、イスラエル人で奴隷であった者は解放されて、家族のもとに帰ることが許されました。さらに、借りていた土地は持ち主に返しました。負債・借金の全ては帳消しとされたのです。(「ユ記」の章)。

すべてが棒引きになるといえば、これほど有難い話はありません。

しかし、「ヨベルの年」を定めた背後の意味は、全地の所有者は神のもので、という考えがありました。富んでいる者はますます富むのがこの世です。そうしたことのないための工夫となり、さらには、いかに富を平等・公平に分配できるかという叡智から生まれた定めともいえます。例えば、土地売買が当たり前の日本の社会ですが、天のお父さまの土地を売買の対象にすることはいけないという根強い考えが、長い間、西欧社会にはありました。中国の「李克強首相」が、「中国には月収千円(約1万5千円)の人が6億人いる」と現状を明かしました。これは全人口の半数近くにあたります。ところが、わずか9万5千人足らずの共産党の幹部たちは、その何千倍、何億倍もの資産を蓄積していると言われているのですから、何ともいびつな社会です。

有名なユダヤの経済学者は、「もし、富の分配が、公平になされていたら、種族・民族間の

対立も争いも少なくなり、世界はもっと平和です」と申しています。

貧富の差があり過ぎます。世界各国で起きているさまざまな、テモとか暴動の背後に、こうした深刻な問題が蓄積されています。

しかし、御民イスラエルが、いかに聖書の教えに忠実とはいえ、現実には、「ヨベルの年」が近くなれば、誰も金の貸し借りはしません。反対に、「近々ヨベルの年が近いので借金しようか」と考える人がいてもおかしくありません。

主イエスは人々にこう言って話し始められました。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりの実現しました。」

「ヨベルの年」が実現したとは、全ての者が大盤振る舞いの恩恵を受けることなのですが、それは、「救い主がおいでになる時には、今まで神の御前に犯してきた罪、今犯している罪、これから犯すであろう罪も含めて、全ての罪が赦される、再び罪に問われることはない」ということだと解き明かされた時、郷里ナザレの人たちは驚嘆したのです。

(2)

「貧しい人々に福音を宣へ伝えるようにと、わたしに油を注がれ、遣わされた」とあります。「貧しい」とは、ただ物が無い、お金がないというだけの話でしょうか。「わたしはいのちのパンである」と証しされたのはイエス・キリストです。主イエスに頼らなくとも、日々の暮らしはなんとかかなると思いき高ぶっている

かもしれません。」いのちの糧」であるキリストを知るなら、すべての不平とつばやき、傲慢や耽溺から自由となります。

さらに、「捕われ人に赦免を告げ、盲人には目が開かれることが告げ知らされる」ともあります。懸命に掻っ込み、引っ込みすれば幸せになれると思っているわたしたちに向かって、主イエスは「受けるより、与える者の幸い」を申されました。

(3)

主イエスが「ヨベルの年」の実現者であることを耳にした時、郷里の人々は、「この人は、ヨセフの子ではないか」と睥睨しました。

それに対して、主イエスは、「医者よ。自分を直せ。」と言っているのか、「預言者も、自分の郷里では歓迎されない」と反論なさいました。

預言者エリヤの時代に、ひどい飢饉がありました。その時、ただ、シドンの地の一人のやもめにだけ、エリヤは遣わされたのではないか。

預言者エリシャの時代はどうか、シリアの將軍ナアマンがライ病になった時、エリシャの言うことを信じたのは彼だけではなかったか・・・、つまり、いかに身近にいる預言者であろうと、ただ信じた者のみが救いに与ってではないかと申されたのです。これを聞いた郷里ナザレの人々は、主イエスを町の外に追い出し崖のふちから投げ落そうとしたといっています。

「医者よ。自分を直せ」とは言いますが、小

児科専門の医師がわが子の病を治せないとなれば、近所の笑いものになりかねません。

「預言者は、自分の郷里では歓迎されない」  
ー、これもまた真理です。近所の医者は信用されないところがあります。わざわざ遠方の医者に足を運ぶ傾向があります。わたしの家の隣りは耳鼻咽喉科でした。現在、院長先生は、わたしの幼なじみの「直ちゃん」です。どうも、いま一つくらくきません。そうしたものです。

東京・高田馬場の牧師は、礼拝後、みなさんとの挨拶が終わると、直ぐに「ジネス・ホテルに足を向け、夕拝の頃になると、またおこそかにお出まし遊ばされたといえます。なれ合うことに注意したのでしょうか。それとも、遠きにおいて、尊い存在となることを望んだのでしょうか。せつら、近づけば近づくほど、ますます親しみを覚え、愛の深さを感じるようになるこそ、主イエスに近い人物なのではないのでしょうか。

しかし、実際は、なかなかそうはいきません。牧師として最初に赴任した教会は、「母教会」(ホーム・チャーチ)でした。わたしのすべてはお里が知られています。以前のわたしを知る人は、「結城牧師」「結城先生」と呼びかけることができませぬ。あの結城さんが講壇から神の言葉を語っているとしか思えませぬ。郷里では敬われないのです。

しかし、それでも、教会というところは、洗礼を受けた方が次第に加わります。「結城先

生「と呼んでゐる者の傍りに、」結城さん。結城さん」と呼んでいねば、いつしかおかしな具合になります。「結城牧師」と正面から呼びかけられるまで、少なくとも15年はかかりました。

郷里という、身近な者から尊敬を勝ちえることは大変なことです。わが夫・わが子・わが母・わが父——、みな同じ屋根の下で寝起きを共にしているとすれば、いかに口酸っぱく福音の真理を伝えても、なかなか真意がとどきません。しかし、それでも、郷里伝道は難しく、身近な家族・親族の伝道は難しいことではならないのです。

「福音の継承」―家族伝道の患―との本を防府教会の図書で見つけました。

満丸茂さんが救われると、満丸一族に、信者81名。牧師15名。クリスチャン・ホーム25家族が与えられたという記録です。満丸家の長女が嫁いで、同盟三島の六反田教会の牧師婦人となっております。驚くばかりの患みです。それでも、韓国やアジア諸国の教会では家族単位で救われることは珍しいことではありません。

日本の教会は、どうしたことか、いまだに一人一人が多いようです。牧師の子供が礼拝に近づかないと行って、悲しんでいる教会役員がおりました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも、あなたの家族も救われます」「とは、約束の御言です。」あなたの家族も救われる」と約束されている家族があるこ

とを信じなければなりません。

【祈ります】

天のおとうさま、めぐみとまこととは、イエス・キリストにより成就したことを感謝します。「神はこう言われる、』わたしは、患みの時にあなたの願いを聞きいれ、救いの日にあなたを助けた。』見よ、今は患みの時、見よ、今は救いの日である」と信じる者となれますように、主の御名に祈ります。』アーメン」